記念碑に記録された日本・モンゴル関係史についての研究

研究代表者：ボルジギン・フスレ（Husel Borjigin, 昭和女子大学国際学部国際学科教授）[1]
共同研究者：田中克彦（katsuhiko Tanaka, 一橋大学名誉教授）
共同研究者：G. ミャグマルサムボー（G. Myagmarsambuu, モンゴル科学アカデミー歴史・考古学研究所教授）
共同研究者：エレーナ・カタソーノワ（Elena L. Katasonova, ロシア科学アカデミー東洋学研究所主任研究員）

1. はじめに

モンゴル国のドルノド県やスフバートル県、ウランバートル市などの地域には、ハルハ河・ノモンハン戦争戦勝記念博物館の他に様々な記念碑や記念標柱、プレートなどが建てられている。また、モンゴル国全域には、第二次世界大戦戦勝記念碑が建立されている。この他、モンゴル国の 5 つの市・県（ウランバートル市、トゥブ県、セレンゲ県、ヘンティー県、アル・ハンガイ県）に日本人抑留死亡者慰霊塔や墓碑など多様な形態の記念碑などが見られる。

記念碑は一般的に、勝利を強調して記念するモニュメントと、犠牲となった生命や生活を表わすメモリアルより構成されているが[2]、モンゴルにおける上記の記念建造物は、戦勝を顕彰・記念し、英雄を称えるモニュメントもあれば、戦没者を悼むメモリアルも少なくない。これら荘厳な記念碑は、記憶の装置として歴史を再構成し続けている。同時に、これらは国民の意志を高揚させ、民族的誇りも表わしている。

モンゴル国では、社会主義時代でも、今でも、特定の記念日において、小学校から大学までの学生や政府・行政機関の役人、軍人、労働者などが集会に参加し、何らかの記念碑に敬意を払うことが義務付けられている。言うまでもなく、モンゴルの国民の歴史認識や愛国主義の喚起・養成において、記念碑は重要な役割を果している。

モンゴル国では、社会主義時代から、博物館や重要な記念碑に関するパンフレットなどが発行されてきた。また、国や各県を紹介する書籍や案内においても、記念碑は欠かせない宣伝の対象の一つとなっており、一部の記念碑はその地域のシンボルにさえなっている。しかし、それは飽くまでもプロパガンダに過ぎず、これら記念碑を対象とする専門的研究は案外少ない。ハルハ河・ノモンハン戦争 50 周年となる 1989 年にウランバートルとモスクワで同時に出版された写真アルバム『ハルハ河――1989』には、同戦争に関わる記念碑の写真も複数掲載されているが、史料の提示や具体的分析などは全くなされていない[3]。同戦争 70 周年になった 2009 年に出版された Ch. チョローンバータルが編集したモンゴル語・ロシア語・英語対照の小冊子『ハルハ河戦勝歴史的記念物』は、戦場となったドルノド県、および首都ウランバートルに建てられた博物館や記念碑などを紹介するアルバムであり、ハルハ河戦争勝利記念博物館とハマル・ダヴァー前線指揮所、14 の記念碑、7 つの戦場、14 の墓標・プレートを紹

介するに止まっている[4]。同年、モンゴル教育・文化・科学省とロシア連邦駐モンゴル大使館、モンゴル科学アカデミー歴史研究所、ロシア科学アカデミー・シベリア支部モンゴル・チベット・仏教研究所が共同で出版した『ハルハ河：1939』では、ハルハ河・ノモンハン戦争におけるモ・ソ協力に重点がおかれているが、同戦争に関わる複数の記念碑とそこで行なわれた記念行事などの写真も掲載されている[5]。同戦争 75 周年となる 2014 年には更に『第二次世界大戦におけるモンゴル：ハルハ河 I』が出版され、同戦争に関するモンゴル国防中央文書館の複数の資料の他に、記念碑なども網羅的に紹介されている[6]。

一方、20 世紀前半、日本とモンゴルの間には、2 度も戦争があった（1939 年のノモンハン事件、1945 年 8 月のソ連・モンゴル連合軍の対日戦）。また、第二次世界大戦の終結直後、約 12,000 名余りの日本人がモンゴルに抑留された。彼らの労働力を利用して、如何に巨大な都市建設が実行されたかは D. マイダルの『モンゴルの建築と都市建設』や I. I. ロマキナの『モンゴルの首都、古いものと新しいもの』、Ch. ダシダワーなどによる『スフバートル像の真実の歴史』、『モンゴルにおける日本の捕虜』などがある程度、明らかにしている[7]。当時、モンゴル国のウランバートル市やスフバートル市の建築群は、ソ連の設計士とモンゴルの彫刻家により設計され、日本人抑留者を中心にその建設が遂行された。また、モンゴルの建築には、「形式は民族的にして，内容は社会主義的」という理念がよく活かされ、パリのコンコルドをモデルにしたと言われている[8]。

しかし、ハルハ河・ノモンハン戦争や対日戦、および抑留はモンゴルでどのように表象され、記念されてきたか、それはモンゴル人の対日認識にどのような影響を与えたかなどについて、国際的なコンテキストの中では殆ど無視されているのが現状である。この点についての研究・考察は、今日行なわれるべき、残された研究項目である。

本研究は近代的記録・記憶行動という視点から、記念碑建設に焦点を当て、新たに発見された歴史記録や記念碑建設に携わった当事者などに対するオーラル・ヒストリー調査の成果に基づいて、モンゴルでは、如何に日モ関係、とりわけハルハ河・ノモンハン戦争や第二次世界大戦の対日戦、および日本人のモンゴル抑留を記念してきたか、歴史の恩怨を乗り越えた日本とモンゴルの友好関係の経験から得られる知見の発見とその検討を目的とする。この目的は表層に止まるものではない。具体的には以下の 2 つの柱を基本コンセプトとして研究する。

（1）20 世紀モンゴルにおけるハルハ河・ノモンハン戦争と関わる記念碑建設の歴史

モンゴルの各地域に建てられた日本と関係する記念碑を精査し、ハルハ河・ノモンハン戦争停戦から今日までのモンゴルにおける記念碑建設の歴史を再整理しながら、冷戦時代、ソ連とモンゴル政府は如何に「歴史の記憶」を操作したか、記念碑などはどのような国際秩序とモンゴル国内の政治状況を反映したかを総合的・相関的に分析し、歴史事実を解き明かす。

（2）モンゴルにおける日本人抑留者墓地や慰霊塔建設

モンゴルにおける日本人抑留死亡者墓地や慰霊塔などは、いつ、どのような歴史的状況の中で、どのように作られたのか。ソ連の強い圧力の中で、モンゴルはどのよう

にイニシアティブを発揮し、日本人抑留者墓地や慰霊塔建設をきっかけに、日本との外交交渉の道を踏み出したかを検討する。

2. モンゴルにおけるハルハ河・ノモンハン戦争と関わる記念碑建設の歴史

モンゴル人は宗教信仰によって、伝統的に、記念碑を建てる習慣はなかった。モンゴルで記念碑を建てるようになったのは、近代以降のことである。1939 年のハルハ河・ノモンハン戦争の停戦直後、ソ連軍はハルハ河西岸のバヤンツァガーンで第 11 戦車旅団長 M. P. ヤコヴレフが戦死した地に記念碑を建て、彼が乗ったとされる BT7 戦車は戦争の記憶としてそのまま記念碑の隣に残され、記念碑の一部となった（写真 1-1 と 1-2）。

写真 1-1　M. P. ヤコヴレフ記念碑

写真 1-2　M. P. ヤコヴレフ記念碑

同年、ソ連軍はまたハルハ河より西に 10 キロほど離れたバルーン・ハーン・オールという丘で戦死した機関銃兵記念碑を、ヤコヴレフ記念碑より北に約 7 キロ離れた所で、第 8 装甲車旅団第 9415 分隊長 A. N. ザグリコフの墓碑をそれぞれ建てた[9]。更にハルハ河東岸の草地で戦死した砲兵指揮官 G. M. クロバタキンとその戦友の記念碑も建てた。これらの記念碑は、いずれもソ連軍将兵の功績を称え、モンゴルの領土を侵略した日本帝国主義を批判するものであった。

モンゴルにおいてハルハ河・ノモンハン戦争の記念碑を広い地域で建て始めたのは、同戦争後 15 年経った 1954 年のことである。同年、ソ連側により、1939 年のハルハ河・ノモンハン戦争で作られた様々な記念碑、墓碑などが修復され、更に新しく建立された。上で述べたソ連軍の各記念碑、墓碑も、それぞれ正式に「M. P. ヤコヴレフ記念碑」、「G. M. クロバタキン記念碑」、「指揮官 A. N. ザルギコフ記念碑」、「バルーン・ハーン・オール機関銃兵記念碑」と命名された。

同年、時のモンゴル人民共和国閣僚会議の決議により、ドルノド県ハルハ郡所在地より南に約 18 キロ離れた所に「モンゴル戦士の記念碑」（写真 2-1 から写真 2-5）が建てられ、その周辺には 1,000 本の木が植えられ、大きな記念行事が行なわれた[10]。これは、モンゴル政府により作られた、同戦争で戦死したモンゴル将兵を記念する最初のハルハ河・ノモンハン戦争の記念碑と言ってよい。

写真 2-1　モンゴル戦士の記念碑

写真 2-2

写真 2-3

写真 2-4

写真 2-5

同時に、ハルハ河・ノモンハン戦争の戦場となったバヤンツァガーンで、戦死したソ連軍将兵を記念する「90 勇士の記念碑」（写真 3-1、3-2、3-3）も建てた。この記念碑は、1959 年（20 周年）、64 年（25 周年）、69 年（30 周年）、89 年（50 周年）にも増築され、記念碑に刻まれた戦死者の数も 110 になっている。この記念碑は、モンゴルでは広く知られており、「90 勇士」を称える詩や歌などが複数作られている。

写真 3-1　90 勇士の記念碑

写真 3-2

写真 3-3

ハルハ河・ノモンハン戦争 25 周年の 1964 年には、モンゴル人民共和国政府閣僚会議によりドルノド県チョイバルサン市東郊に同戦争で戦死したソ連空軍戦士を記念する「ソ連空軍戦士記念碑」（写真 4）が建てられた。この真っ白な細長い記念碑は丘に建てられており、崇高で気高いイメージが与えられている。

写真 4　ソ連空軍戦士記念碑

ハルハ河・ノモンハン戦争 30 周年の 1969 年には、モンゴル青年同盟によりノモンハン戦場で 2 つの記念碑が建てられた。1 つ目はバヤンツァガーンでモンゴルの伝統的居住ゲルの壁となるハーナをモチーフとした「ハーナ記念碑」（写真 5）である。これはモンゴル・ソ連軍により日本軍の侵略を阻止し、粉砕したというメッセージを伝えている。

2 つ目はハルハ河郡の所在地に作られた、剣の形をモチーフとした「イルデン記念碑」である。これはモンゴル・ソ連の両国の人民の固い友情を称えるイメージを伝えており、ソ連との友好の証となっている。

モンゴル人民革命 50 周年の 1971 年に、モンゴル政府はウランバートル市南部のザイサン・トルゴイに「ソ連軍記念碑」（写真 6）を建てた。威風堂々たるソ連兵がソ連の国旗を高く掲げた彫像（高さ 27 メートル）と、灯火台「トルガ」を囲む、モザイクの壁絵が施されたコンクリートの輪、展望台により構成されたものである。1939 年のハルハ河・ノモンハン戦争と第二次世界大戦勝利に大きく貢献したソ連軍の功績に対する礼賛が中心テーマとなっている。壁絵は、出征、勝利、平和と言った項目により構成されている。真ん中の部分は、日章旗とナチス・ドイツの国旗を踏みつけるソ連兵、その隣にはモンゴル兵が立っている。いずれの場面からも分かるように、ソ連兵が主役でモンゴル兵が協力者の立場に立たされている。

写真 5　ハーナ記念碑

写真 6　ソ連軍記念碑

ハルハ河・ノモンハン戦争 35 周年になった 1974 年には、同戦争を指揮したゲオルギ・ジューコフ（1896～1974 年）のハマル・ダヴァーにあった前線指揮所が修復さ

れた。この指揮所の修復には、同年死去したジューコフを記念する意味もあったことは明らかである。後の 1995 年に、この指揮所に更にスター（星）記念碑が増築された。

ハルハ河・ノモンハン戦争 40 周年になった 1979 年には、モンゴル政府は戦場に同戦争で戦死したモンゴル兵を記念する「80 勇士の記念碑」（写真 7）を営造した。これは、上で述べた、ソ連兵を記念する「90 勇士の記念碑」を意識して作ったものと思われる。同記念碑は、「モンゴル人民革命軍・国境警備軍記念碑」とも呼ばれている。ソ連邦英雄とモンゴル英雄の称号を持つモンゴル初の宇宙飛行士 J. グラグチャー（1947 年～）は、1981 年に宇宙飛行をした際に、この記念碑の土を宇宙に持って行ったと言われている。この記念碑の重要性はこのことによっても窺い知ることができる。

写真 7　80 勇士の記念碑

ハルハ河・ノモンハン戦争 45 周年になった 1984 年には、モンゴル人民革命党幹部会の決議により、ハルハ河郡ハマル・ダヴァーで「ハルハ河戦勝記念塔」（写真 8）が建てられた。この記念碑はソ連の社会主義労働英雄、著名な芸術家 A. N. ブルガノフや設計士 L. V.ミソジニコフ、モンゴルの設計士チョイジルジャブなどによりデザインされた。記念碑の高さは 54 メートル、幅は 33 メートルであり、110 トンの鋼材と 33 トンの銅で作られたという[11]。正面にはソ連とモンゴル兵 2 名が肩を並べ、銃を担って立ち、その両側の翼の部分には、旗を持って前進する兵士や戦闘機、戦車、

重砲などが刻まれ、勇壮の気勢を際立たせている。

写真 8　ハルハ河戦勝記念塔

写真 9　ハルハ河戦争勝利記念博物館

同年、モンゴルの著名な設計士 G. ツェレンドルジが設計した、ハルハ河戦争勝利記念博物館（写真 9）もハルハ河郡で竣工した。更に、ウランバートル市では、ハルハ河・ノモンハン戦争とソ連の対ドイツ戦を指揮したジューコフを記念する博物館（写真 10-1、10－2）と記念碑（写真 11）が同時に落成した。

写真 10-1　ジューコフ博物館

写真 10-2　ジューコフ博物館（内部）

写真 11　ジューコフ記念碑

ハルハ河・ノモンハン戦争 50 周年の 1989 年には、モンゴル人民共和国政府閣僚会議の決議により、チョイバルサン市で「モンゴル戦士記念碑」（写真 12-1、12-2）が落成した[12]。設計士はチョイジルジャブであり、芸術家 G. ツェレンドルジや L. ブフバトなどにより作られた。記念碑の真ん中は剣を掲げて突進する颯爽として勇ましいモンゴル騎兵の彫像であり、その後ろには高さ 24 メートルのアーチ形の記念碑が聳え立ち、更に周囲をモザイクの絵が施された半円型の壁が囲み、両側にはそれぞれ戦車、装甲車各一台が配置されている。壁画は、同じく出征、勝利、平和のような内容になっているが、日本兵もソ連兵も描かれていないことは注目すべき点である。

ハルハ河・ノモンハン戦争 55 周年になった 1994 年に、ジューコフ前線指揮所の近くにジューコフを守るソ連の衛兵を記念する「ソ連戦士白金記念碑」（写真 13-1、13-2）が作られた。赤い星の他に、十字架が立てられていることも、目を引く。

写真 12-1　モンゴル戦士記念碑

写真 12-2　モンゴル戦士記念碑

写真 13-1　ソ連戦士白金記念碑

写真 13-2　ソ連戦士白金記念碑

同年、タムサグボラグで「ソ連空軍戦死者記念碑」（写真 14）も作られた。高く聳えている 2 本の塔は、「M. P. ヤコヴレフ記念碑」の塔の構造に近い。

写真 14　ソ連空軍戦死者記念碑

ハルハ河・ノモンハン戦争 60 周年の 1999 年に、チョイバルサン市で「爆弾記念碑」（写真 15）が作られた。日本軍が 1939 年 5 月にサンベイース（今のチョイバルサン市）を爆撃した際に、その爆弾が落下した場所にこの記念碑が作られた。記念碑は爆弾の彫刻で、説明も文字も何も書かれていないが、この地が日本と戦争と深く関係付けられており、戦争の時代を想起させられる。

写真 15　爆弾記念碑

ハルハ河・ノモンハン戦争 70 周年になった 2009 年に、モンゴル国英雄、カザフ人の M. エケ（M. Eke）の記念碑（写真 16）がハルハ河の畔に作られた。M. エケはモンゴル国最西端のバヤン・ウルギー県の出身であり、ハルハ河・ノモンハン戦争の時、モンゴル人民革命軍第 6 師団第 17 連隊長を務め、戦死した。モンゴル国政府は 1979 年に M. エケに「モンゴル国英雄」の称号を授与した。この記念碑はバヤン・ウルギー県政府によって作られた。この記念碑が物語っているように、ハルハ河・ノモンハン戦争はモンゴルの最東端と最西端、言い換えればモンゴル全国を結び、各民族を団結一心させた。

更に 2011 年に、ドルノド県文化・芸術家連合会の提案で、同県で「危険な爆弾」と言う記念碑が作られた。草原に建つこの記念碑はチョイバルサン市の「爆弾記念碑」を模倣したものである。

このように、モンゴルにおけるハルハ河・ノモンハン戦争の記念碑建設は、精力的に今日まで続けられている。

写真 16　M. エケ記念碑

モンゴルにおけるハルハ河・ノモンハン戦争の記念碑の建設史を整理して分かるように、現代モンゴルにおける記念碑は 1930 年のスフバートル像の落成に遡ることができるが、社会主義時代、同国における記念碑建設は、レーニン像やスターリン像、チョイバルサン像などを除いて、主にハルハ河・ノモンハン戦争と第二次世界大戦を中心に展開したのである。それも最初は、主に戦死したソ連軍兵士を記念するものであった。1954 年以降、モンゴルでは、モンゴル軍を記念する記念碑が現れたが、それらにおいてはモンゴル・ロシア（ソ連）の強固な友好的関係が強調され、ソ連軍の記念碑の数もモンゴル軍を記念するものを上回っている。これらの記念碑において、日本軍は完全に批判の対象となっている。ペレストロイカ（民主化）以降、モンゴルにおけるロシアの影響力は一時的に衰退したが、近年、その権益は復活しつつある。これは、記念碑の建設においても反映されている。ハルハ河・ノモンハン戦争と関わるロシア軍（ソ連軍）とモンゴル軍の記念碑は「栄誉の碑」であり、それと対照的に、チョイバルサン市の「爆弾記念碑」やドルノド県の「危険な爆弾」記念碑はいずれも「警告の碑」である。ハルハ河戦争勝利記念博物館の外に建てられたウルジー記念碑（写真 17-1、17-2）には、モンゴル語・日本語で平和のメッセージが謳われているが、それは、実際、日本政府の援助で作られたものである。デザインから見ると、これらの記念碑において、ロシアの記念碑の影響が強いことは否定できないが、「ハーナ記念碑」のように、民族的特徴も見られる。

写真 17-1　ウルジー記念碑

写真 17-2　ウルジー記念碑の碑文

3. モンゴルにおける日本人抑留者墓地や慰霊塔建設

1947 年 10 月 14 日から 28 日の間に、モンゴルに抑留され、生き残った 10,705 名の日本人捕虜がソ連に移送されたが、その内の 21 名はソ連のナウシキ駅からナホトカへの移送の途中で死亡したため、日本に戻ったのは 10, 684 名だという[13]。1,600 名余りの抑留者がモンゴルで死亡した。

モンゴルに残された日本人抑留者の遺骨の調査や、残留者の日本帰還について、日本赤十字社を始め、日本の民間団体や個人は、1954 年からモンゴル人民共和国と交渉するようになった。同年 6 月、モンゴルに抑留された最後の 4 名（重犯罪者）がモンゴル政府より中国に引き渡され、一年後の 1955 年 11 月にやっと日本に送還された[14]。

1962 年 5 月 16 日、モンゴル人民共和国閣僚会議は「日本人捕虜墓地の整備・保護について」という閣議決定を下し、ウランバートル市のダンバダルジャー、ホジルボラン、セレンゲ県スフバータル市とユルーにある日本人捕虜の墓地を整備し、常時保護することを、ウランバートル市とトゥブ県、セレンゲ県の各人民代表議会執行機関に命じた[15]。この決定に従い、上記各地域で、死亡した日本人抑留者の墓についての調査が行なわれた。

紆余曲折のプロセスを経て、1966 年、モンゴル赤十字社とモンゴル外務省の共同調査で、日本人抑留死亡者の数や、遺骨が埋蔵された場所のデータが整理された。1,600 名余りの死亡者の内、1,597 名の遺骨が具体的に地名の分かる 16 か所に埋葬されたことが判明した。その内訳は、ウランバートル市の 4 か所に 1,109 体、セレンゲ県の 6 か所に 408 体、トゥブ県の 4 か所に 74 体、アル・ハンガイ県、ヘンティー県に 1 体と 5 体である[16]。

1966 年 5 月、モンゴルの日本人捕虜埋葬問題を解明する委員会によってセレンゲ県のスフバータル市やアルタンボラグ市、ズーンハラー、ユルー、バヤンゴル、ズーンブレン（写真 18）などの地域で墓標の建設活動が始まった。

写真 18　ズーンブレンにおける日本人抑留者墓地

当委員会は、セレンゲ県の当地に赴き、土地の人々と確認した上で、日本人捕虜を埋葬した場所を特定し、そこに何体の遺骨が埋葬されているか確認し、日本人抑留者墓地を整備・保護する問題に関する予算案を立てた[17]。同時に、トゥブ県、アル・ハンガイ県、ヘンティー県の日本人抑留者墓地の整備活動も行なわれた。

皮肉なことに、これら日本人抑留者の墓地を整備・保護する事業に携わったもの、とりわけ現場で働いたものの多くは、1945 年 8 月以降、内外モンゴルの統一を夢みて、モンゴルに移住することを選んだ内モンゴル人か、バルガ人、あるいはブリヤート人である[18]。

他方、1982 年から 1992 年にかけて、成田山新勝寺の鶴見照碩貫首が一部の資金を提供し、上記各地域に埋葬された日本人抑留死亡者の墓標などが修復された[19]。

2001 年 10 月 15 日、日本政府が出資した、ダンバダルジャー寺（写真 19）の隣にある日本人死亡者慰霊碑（写真 20）が竣工した。慰霊碑の広さは 9,000m^2 であり、祈りの広場を円形にしたことは「日本」を象徴しており、中央にモンゴルの地図を刻んで収容所の跡地を示し、すべての抑留死亡者への慰霊の意思を表わしている。ここには、ハルハ河・ノモンハン戦争の日本軍戦死者も合祀されており、同戦争のモンゴル領内の戦場にも日本軍兵士の遺族が作った標柱が立てられている。

写真 19　ダンバダルジャー寺日本人死亡者慰霊堂

写真 20　日本人死亡者慰霊碑

碑文には「さきの大戦の後 1945 年から 1947 年までの間に祖国への帰還を希みながらこの大地でなくなられた日本人の方々を偲び平和への思いをこめてこの碑を建設する」と書かれている。この慰霊碑は、日本の厚生労働省がモンゴル赤十字社に委託して、管理を行なっている。

おわりに

以上は、本課題のこれまでの調査・研究の成果のまとめである。

記念碑ほど「近代文化としてのナショナリズムを見事に表象するものはない」し、それ故公共的、儀礼的敬意が払われる[20]。国民の歴史認識の形成において、記憶の媒体としての博物館や記念碑、記念塔は重要な役割を果している。本研究は、モンゴル地域における日モ関係の記念建造物を中心に検討したが、モンゴル地域を取り巻く諸勢力の関係を問い直すことで、日モ関係史をより正確に理解するためのデータと視点の獲得が可能となり、国際的にも大きな期待が寄せられている。

ただし、歴史は連続的な出来事によって繋がっており、決して断絶的なものではない。モンゴルから見れば、日本人のモンゴル抑留ないしソ連抑留は、1945 年 8 月までの戦争の責任によるものであり、そこから更に戦後の日本とモンゴルの友好の繋がりが見出されている。

謝辞

本研究は公益財団法人 JFE21 世紀財団 2016 年度「アジア歴史研究助成」の助成を受けて行なわれた。本報告書はその成果の一部である。財団のご支援に対し、厚く御礼申し上げる。

また、現地調査において、下記の方々のご協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

Ts. トゥメン（Ts. Tumen, モンゴル国「バルガの遺産」協会長）

J. スフバータル（J. Sukhubaatar, モンゴル国防軍ドルノド県駐在部隊司令官・大佐）

L. ミャグマルスレン（L. Myagmarsuren, モンゴル国ハルハ河戦争勝利記念博物館長）

B. バトドルジ（L. Myagmarsuren, モンゴル国ドルノド県交通・輸送開発課長）

D. Damdindorj（“ДДГ”ХХК 社長）

孟松林（Meng Songlin, 中国フルンボイル歴史文化研究院長）

徐占江（Xu Zhanjiang, 中国ハルビン市社会科学院ノモンハン戦争研究所長）

バトムンフ（Batmunkh, 中国フルンボイル市シネ・バルガ左旗文物管理所長）

註

[1] 採択時は、昭和女子大学人間文化学部国際学科教授。

[2] マリタ・スターケン『アメリカという記憶――ベトナム戦争、エイズ、記念碑的表象』（未来社、2004 年、 91 頁）。

[3] Т. Осор, А. Крвель, *Халхын гол – 1939*, Москва-Улаанбаатар, 1989（T. オソル、A.ケリヴェリ『ハルハ河――1939』モスクワ―ウランバートル、1989 年）.

[4] Ч.Чулуулнбаатар, *Халхын голын Ялалтын Түүхийн дурсгалт газрууд,* Улаанбаатар, 2009（Ch. チョローンバータル『ハルハ河戦勝歴史的記念物』［モンゴル語・ロシア語・英語］、ウランバートル、2009 年）.

[5] МУБСШУЯ, ОХУ-аас Монгол улсад суугаа ЭСЯ, Монгол улсын ШУА-ийн Түүхийн хүрээлэн, ОХУ –ын ШУА-ийн Сибирийн салбарын Монгол, Төвд, Буддын судлалын хүрээлэн, *Халхын гол: 1939*, Улаанбаатар-Москва, 2009（モンゴル教育・文化・科学省、ロシア連邦駐モンゴル大使館、モンゴル科学アカデミー歴史研究所、ロシア科学アカデミー・シベリア支部モンゴル・チベット・仏教研究所『ハルハ河：1939』、ウランバートル・モスクワ、2009 年）.

[6] Д. Мөнх-Очир, *Монгол улс дэлхийн II дайнд: Халхын гол I*, Улаанбаатар, 2014（D. ムンフオチル『第二次世界大戦におけるモンゴル：ハルハ河 I』、ウランバートル、2014 年）.

[7] Д. Майдар, Архитектура и градостроительство Монголии, Москва, 1971（D. マイダリ『モンゴルの建築と都市建設』、モスクワ、1971 年）. И. И. Ломакина, Монгольская столица, старая и новая, Москва, 2006（I. I. ロマキナ『 モンゴルの首都、古いものと新しいもの』、モスクワ、2006 年）. Ч. Дашдаваа, Т. Гантөмөр, Ч. Болд, Сухбаатарын хөшөөний үнэн түүх, Улаанбаатар, 2011（Ch. ダシワダワー、T. ガントゥムル、Ch. ボルド『スフバートル像の真実の歴史』、ウランバートル，2011 年）.

[8] Ч. Дашдаваа, Т. Гантөмөр, Ч. Болд, Мөн тэнд, тал.32（Ch. ダシワダワー、T. ガントゥムル、Ch. ボルド、前掲『スフバートル像の真実の歴史』、p.32）. 田中克彦「モンゴル人民共和国による日本人捕虜の労働力の獲得とウランバートル市建設」（ボルジギン・フスレ編『日本人のモンゴル抑留とその背景』三元社、2017 年、pp.15-23）。

[9] Д. Мөнх-Очир, Мөн тэнд, тал. 8-15（D. ムンフオチル、前掲『第二次世界大戦におけるモンゴル：ハルハ河 I』、pp.8-15）.

[10] Д. Мөнх-Очир, Мөн тэнд, тал. 8-15（D. ムンフオチル、前掲『第二次世界大戦におけるモンゴル：ハルハ河 I』、pp.8-15）.

[11] Д. Мөнх-Очир, Мөн тэнд, тал.6（D. ムンフオチル、前掲『第二次世界大戦におけるモンゴル：ハルハ河 I』、p.6）.

[12] Ч.Чулуулнбаатар, Мөн тэнд, тал.3-5（Ch. チョローンバータル、前掲『ハルハ河戦勝歴史的記念物』、pp.3-5）.

[13] ヴィクトル・カルポフ著、長勢了治訳『「シベリア抑留」スターリンの捕虜たち――ソ連機密資料が語る全容』北海道新聞社、2001 年、274 頁）。

[14] ボルジギン・フスレ「日本人のモンゴル抑留についての基礎的研究」（『学苑』第 886 号、昭和女子大学近代文化研究所、2014 年、1-20 頁）。

[15] Монгол Улсын Үндэсний төв архив（モンゴル国立中央文書館）， Х.383, Д.1, ХН.43, Х.1.

[16] G. ミャグマルサムボー「モンゴル・日本両国の関係とモンゴルに残された日本軍将兵の遺骨について」（ボルジギン・フスレ編『日本人のモンゴル抑留とその背景』三元社、2017 年、115 頁）。

[17] 同上。

[18] 筆者に対するソナダイチン・バボー（1940 年生れ、ホブド出身、ザハチン人）の談話、2014 年 8 月 13 日、スフバートル市。筆者に対するブレンバヤル・ビレグト（1930 年 1 月 28 日生れ、内モンゴル・イフジョー盟出身、1945 年内外モンゴルの統一のためにモンゴル軍幼年学校の教官、生徒と一緒にモンゴルに行き、捕虜となった）の談話、2015 年 5 月 3 日、ウランバートル（ブレンバヤル・ビレグト宅）。筆者に対するパラム・ガルバダラフ（1940 年 11 月生れ、トゥブ県出身、バルガ人）の談話、2015 年 5 月 3 日、ウランバートル（パラム・ガルバダラフ宅）。

[19] サンボーギィーン・トボードルジ著、木村理子訳、春日行雄、D. フフ、Ts. チョイジルスレン監修『モンゴルにきた日本のサムライ』（私家版［神奈川・横浜］、2008 年、56 頁）。

[20] ベネディクト・アンダーソン著、白石隆、白石さや訳『定本 想像の共同体――ナショナリズムの起源と流行』（書籍工房早山、2014 年［初版は 2007 年］、32 頁）。

（本報告書の写真の撮影者はボルジギン・フスレである。）